

JA共済 地域貢献活動

PROJECT STORY



VOL. **05**

北海道 JA今金町
食育教室
「今金の食を知ろう!作ろう!食べよう!」

令和5年12月



次世代の生産や消費を担う子どもたちに 食や農への理解を深める場を提供したい

地域の小学生に思い出に残る特別な食育体験を

北海道のJA今金町は、地域の小学生を対象に食育教室を主催しています。農業が基幹産業である今金町でも、近年は農業従事者が減少。生産者やJAが地域で果たす役割や地元食材について学ぶ場を提供し子どもたちが地域の農業や特産物への理解を深めるきっかけを作り将来の「食と農の応援団作り」を目指します。JA共済連は「地域・農業活性化積立金」を活用してこの活動を支え地域に根ざした継続的な取組みになるよう応援しています。

町内の農家は10年で約3割減 次世代への継承が大きな課題に

北海道の渡島半島北西部に位置する今金町は、道南随一の「農業のまち」として発展してきました。幻の芋とも呼ばれる「今金男しゃく」を始めとした野菜や稲作、酪農畜産など多彩な農業が営まれています。

しかし近年は高齢化による担い手不足が進行し、今金町の農家はこの10年で約3割も減少。「私たちも生産者の減少は大きな課題と受け止めています」とJA今金町 企画審査課課長の工藤耕治さんは危機感を募らせました。また最近、JAや農家でも人材確保が難しくなるなど「地域の人にJAや農業者の働きを、JA自らが直接伝えていく必要がある」という思いが強まっていました。

そこでJA今金町では、令和2年度に新設された企画審査課で農業やJAに関する情報発信の

強化を始めました。課長に就任した工藤さんは、以前から地域の農業法人が行っていた小学生向けの米作り体験授業に注目しました。

「田植えから収穫、精米までを体験する内容で、次世代を担う子どもたちが食や農に興味を持つきっかけづくりとして有意義な取り組みでした。それを見て、JAも食育教室ができないかと考え始めたのです」

加えて工藤さんが刺激を受けたのが、若手農家が地域農業を盛り上げるために奮闘する姿でした。青年部がFacebookを活用した「今金男しゃく」のPR企画を展開し、大反響を巻き起こしたのを見て「自分と同世代の農家が地域のために頑張っているのに、JAがやらなくてどうする」と大いに触発されたと熱く語ります。



JA今金町
管理部企画審査課 課長
工藤耕治さん



教育委員会や学校関係者を巻き込み 町ぐるみの取組みを目指す

今金町では昔から町が中心となり食育活動に力を入れてきましたが、JAならではの食育教室を模索する中、ヒントとなったのが隣接するせたな町の小学校が実施する食育の授業でした。北海道のご当地グルメである札幌スープカレーの老舗有名店「札幌らっきょ」の井手剛シェフを講師に招いて調理実習を行う内容で、見学した工藤さんは「ぜひ今金町でもやりたい」と決意します。

「テレビCMにも出演する有名シェフが自分の学校に来て、本格的なスープカレーのレシピを教えてくれる。大人が見てもワクワクする楽しい授業で、子どもたちの思い出に残る特別な食育教室になると確信しました」

工藤さんの行動は迅速でした。授業を見学したのが令和2年11月で、翌月には企画書を作成。地域の農業や特産物について座学を行うこと、調理実習では可能な限り地元食材を使うこと、プロの調理を体験すること、継続実施により地域に根差した食育教室にすることの4点を



調理実習の講師を担当した、札幌スープカレーの老舗有名店「札幌らっきょ」の井手剛シェフ



井手シェフが今金町の野菜の魅力を伝え、食材に関する質疑応答も交えることで、活気ある調理実習となった

軸に企画を検討し「子どもたちが地域の農業や特産物への理解を深めるきっかけとし、将来的に『食と農の応援団作り』につなげる」を目標に掲げました。

また町ぐるみの取組みにしたいと考えた工藤さんは、教育委員会に相談し隣町の食育授業を共に見学。有意義な取組みであるとの認識を共有し、教育委員会の理解を得た上で食育教室の企画立案を進めました。

さらに町内の今金小学校と種川小学校にも丁寧な提案と説明を実施。工藤さんの熱意が伝わり、令和3年度から2校の6年生を対象に、総合学習の時間を使って食育教室を年に1度行うことが決まりました。

「もともと今金小学校では、3年生が今金男しゃくの栽培を体験したり、5年生が前述した米作り体験授業を実施するなど食育に力を入れており、JAとしては6年生の食育教室を集大成的な位置付けとしたいと考えました。小学校の先生がたには、その思いに共感して頂いたものと理解しています」

さらにせたな町の食育授業をコーディネートしていた株式会社ブレナイ社を通じて、今金町

でも井手剛シェフに講師を依頼。北海道各地で食を通じた地域活性化に取り組む井手さんも、食育教室の趣旨に賛同してこころよく引き受けてくれました。

JA共済連の助成金や発信力が 食育教室の継続をバックアップ

一方で、近年はJA今金町の主催で食育教室を行った実績がなかったため、予算の継続的な確保が課題でした。そんな中、心強いサポーターとなったのがJA共済です。

「JA共済連の北海道本部に相談したところ、地域農業振興に資する効果的な取組みのため、『地域・農業活性化積立金』の助成を受けてはどうかとアドバイスをもらいました」と振り返る工藤さん。それを受けて申請を行い、令和3年度の助成が決定。その後も継続して同積立金の助成を受け、食材費や講師料に活用しています。

JA共済連北海道本部 普及部の真鍋貴子さんは、JA今金町の食育教室を支援する理由について「子どもたちに地域農業への気づきを与え、地産地消につながる良い取組みだと感じています」と話します。

「児童が地元食材を使った調理を体験することで『自分の町ではこんなにおいしいものを作っているのだ』と誇りを持ち、普段の生活で買っている時も、数ある食材の中から地域の農産物を意識し始める。そうなれば長い目で見た時に、未来の生産者や消費者の育成につながると期待しています」

また、工藤さんは「取組みを継続するには『やっ



食育教室の趣旨に賛同し、助成支援のサポートをしたJA共済連北海道本部 普及部の真鍋貴子さん

て終わり』ではなく、毎回の実施効果を広く発信して次につなげるのが重要」と話します。各種SNSや地方紙を通じて食育教室の様子を発信したり、保護者やJA関係者向けの報告書を配布したりと、活動の周知に努めています。この情報発信においても、JA共済連によるサポートがありました。

「JA共済連は広域に向けた発信力やメディア対応力があり、この取材も北海道本部が全国本部に今金町の取組みを推薦してくれたことで実現しました。SNSや広報誌による発信は私たちでも可能ですが、地方の小規模なJAが新聞やテレビなどのマスメディアに取り上げてもらうのは時間も労力もかかるので、JA共済連の力を借りて、JA今金町の活動が多くの人の目に触れる機会を作れるのは、本当にありがたく思っています」



「農業を担う親に感謝したい」 子どもたちにも新たな気づきが

JA今金町の食育教室「今金の食を知ろう！作ろう！食べよう！」は、令和5年11月28日に3回目の開催を迎えました。当日は今金小学校の教室に、種川小学校の児童を含む37人の6年生が集合。まずはJA今金町の工藤さんによる講話から食育教室がスタートしました。

用意したスライドや動画を見せながら、今金町の農業やJAが食育教室を実施する意義を説明する工藤さん。農家が減少していることも伝え「生命の源である食料を生産するのが農業の役割。皆さんが食や農業に関心を持ち続ける大人になってくれたら嬉しいです」と語りかけました。

続いて今金小学校栄養教諭の本多未来さんが、調理実習で使う食材に含まれる栄養価や地産地消の大切さについて解説。計30分の座学が終わると、家庭科室へ移動して調理実習の開始です。

「玉ねぎってこんなにたくさん使うんだ」「いい匂いがする！」と、初めて体験する本格的な



JAが食育教室を実施する意義を、スライドや動画で説明

スープカレー作りに大興奮の子どもたち。調理講師を務めるシェフの井手さんは「地元で採れた野菜だけでカレーが作れるなんて贅沢だね」と、今金町の農産物がいかに豊かで多彩かをさりげなく伝えます。完成したスープカレーを頬張った児童たちは「どの野菜もおいしい！」「苦手なアスパラガスもおいしかった」と大満足の様子でした。

親が農家だという児童は「うちの畑で採れる野菜が毎日食事に出るので、地元のを食べられるのは当たり前だと思っていた。でも今日の授業で農家がいないと米も野菜も食べられないとわかったので、親に感謝したいです」と誇らしげに話しました。また別の児童は「将来は料理の仕事に就いてお店を開きたいので、自分で育てた野菜を使ったメニューが出せたらいいな」と農業への興味を口にしました。

工藤さんも子どもたちの反応から、食育教室が農業への理解促進やJAファン作りにつながっていると感じています。

「毎回実施後に児童からお礼の手紙をもらうのですが、『JAの皆さんが食材を提供してくれたおかげでおいしいスープカレーが作れました』『これからは今金町の食材を積極的に食べたいです』といった感想を読むと、感動して思わず涙ぐんでしまいます」

食育教室をきっかけに JAがより身近な存在に

食育教室を始めたことで、JAと地域のつながりも深まっています。栄養教諭の本多さんは「以前は小学校にとってJAは少し遠い存在でした。

でも食育教室をきっかけに距離が縮まり、5年生の米作り体験授業をJAが取材して情報発信したり、3年生の今金男しゃくの栽培体験に協力して頂ける農家を紹介してくれたり、より踏み込んだ連携が取れるようになりました」と話します。

この食育教室には教育委員など教育関係者も訪れ、子どもたちの喜ぶ姿や熱気あふれる授業の様子を体感。「地域の人たちと生産現場のつながりとなり、今後さらに連携を強化していければ」と工藤さんは意気込みます。



「食と農の授業でJAと子どもたちとの関係も深まっている」と話す今金小学校栄養教諭の本多未来さん

食育教室に共に取り組む関係者からも、JAグループとの連携に期待する声が寄せられています。シェフの井手さんは「JAには生産者から消費者まで広く巻き込む力がある。私も食育を通じて様々な社会課題解決に取り組んでいるので、食の中心を担う組織であるJAが良きパートナーでいてくれたら心強く思います」と話します。ブレナイ社の日原康貴さんも「食育イベントは一回限りの打ち上げ花火で終わることも多いが、地域に根付いたJAなら長期的に取り組める。食の大切さを子どもに伝えるのは私たち大



今後も食の大切さを子どもに伝えていきたいと語る、(左から)日原さん、工藤さん、本多さん、井手さん

人の義務ですから、ぜひ今後も協力して食育教室に取り組んでいけたら」とメッセージを送ります。

JA共済連の真鍋さんは「JA共済連やJAの地域貢献活動を広くPRし、認知度を高めることは私たちの重要な役割。地域・農業活性化積立金の活用や広報活動によって、今後もJAの取組みを後押ししたい」と力強く抱負を語ります。「もしもの時に備えて保障を提供するのはもちろんのこと、地域の課題に向き合い、地域の皆様に様々な形で貢献し、『何かあった時はJA共済が頼りになる』と思って頂ける存在になれたら理想的です。これからも各地のJAの取組みを支援し、地域の人たちにJAグループを身近に感じてもらえるよう努めます」今後もJAとJA共済連が協力し、農業の発展と地域社会の活性化に取り組んでいきます。



取材協力者のご紹介



JA今金町
管理部企画審査課 課長
工藤 耕治さん

【経歴】

平成13年 JA今金町 入組 生産資材課
平成16年 農業経営課
平成19年 管理課(企画担当)
平成24年 融資課
平成25年 農業経営課
平成30年 販売課
令和 2年 管理部企画審査課

【この活動を通じて自分が感じたこと】

今金町は人口5千人にも満たない小さな町ですが、食育教室を通じて児童や小学校の先生、行政関係者など、たくさんの方との出会いがありました。それがJAを知り、JAを好きになってもらうことにつながると信じています。

【地元の好きなおところ】

組合員の皆さんが「我が町のJA」として、JA今金町に親しみや共感を抱いてくれているところです。その期待に応えられるように、地域を盛り上げるために頑張りたいです。

【休日の過ごし方】

家族で出かけたり、子どもとゲームをしたり、愛車を手入れしたりと、自分が好きなことを楽しんでいます。食育教室に影響を受けてスープカレーを作ること、家族に喜ばれています。

JA共済連北海道本部担当者のご紹介



JA共済連北海道本部 普及部
JA活動支援グループ
真鍋 貴子さん

【経歴】

平成11年 入会 生命建物査定部 生命査定課
平成16年 電算部電算課
平成17年 生命契約課
平成18年 東日本引受センター 生命契約グループ
平成19年 自動車損害調査部 自賠責損害調査グループ
平成26年 業務部生命査定グループ
平成27年 北海道業務センター 生命査定グループ
令和 4年 普及部 JA活動支援グループ

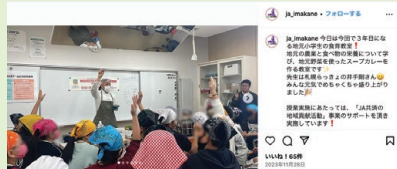
食育教室「今金の食を知ろう!作ろう!食べよう!」の広報活動について

JA今金町では、情報発信のツールとして各種SNSを活用。食育教室の様子も投稿し、取組みを継続していくための活動周知につなげています。



JA今金町 SNS公式アカウント

Instagram @ja_imakane
X(旧Twitter) @ja_imakane
YouTube @jaimakane



※2023年11月28日Instagram投稿より

食育教室「今金の食を知ろう!作ろう!食べよう!」の概要

活動の背景

- 地域の担い手減少や後継者不足が進行し、直近10年で農家が約3割減少。
- 農業やJAが果たす役割をJAが直接地域の人たちに伝える必要性が高まっていた。



活動の内容

- 隣接地域の小学校で実施されていた食育授業を参考に周囲を巻き込みながら地元の児童を対象に今金町の農産物を使った食育教室を企画。
- 有名シェフが講師を務める地元食材を使ったスープカレー作りとJA職員や小学校の栄養教諭による座学を組み合わせ地域農産物や地産地消について総合的に学べる構成とした。
- 食材費や講師料にはJA共済の「地域・農業活性化積立金」を活用。「今金男しゃく」や「今金米」を始めとする地元食材をふんだんに使い児童が今金町の農業や農産物の魅力に気づききっかけを提供している。



活動の成果

- 令和3年度から毎年の恒例行事として実施を継続し児童から「地元食材のおいしさに気づいた」「農業に興味を湧いた」などJAの取組みに感謝の声を届いている。
- 食育教室をきっかけにJAと地域の関係が深まり今金小学校が取り組む他の食育活動に協力したりと地元とのつながりが強まっている。



活動のポイント

1

地域農業を盛り上げる役割をJAが担うべきという使命感

2

他地域の食育活動を参考に独自の取組みを迅速に企画

3

教育や食育の地元関係者を広く巻き込んだ実行力

InstagramでもJA・JA共済の地域貢献活動を紹介しています。

「どやふる/DOYAFUL Powered by JA共済」
@doyaful_jakyosai



「JA共済 地域貢献活動 PROJECT STORY」は今後もシリーズとして発行を予定しています。同取組みを動画で紹介している「一緒に地域を咲かせよう」もぜひご覧ください。

県域独自の地域貢献活動を動画で紹介
「一緒に地域を咲かせよう」

JA共済 咲かせよう 検索



▶ https://social.ja-kyosai.or.jp/prefecture_case/

編集後記

地域特産物・農業の魅力についてわかりやすく伝えることはもちろん、子どもたちにとって一生の思い出となる一大イベントとして地域貢献活動が定着していることが印象的でした。地域の課題に向き合う担当者の熱い想いは運営されている各種SNSでも伝わってきます。JA今金町のSNSアカウントもぜひチェックしてみてくださいね!
(西川・岡田)

発行: JA共済連 全国本部 農業・地域活動支援部